

【基本】

タイトル：言語の壁がなくなったら：機械翻訳と未来社会

日時：2017年1月21日（土曜日）

場所：上智大学四谷キャンパス 10号館 10-301号室

【登壇者】

◆報告者

- ・西島佑（上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科国際関係論専攻博士後期課程）
- ・羽成拓史（神奈川大学非常勤講師）
- ・瀬上和典（東京工業大学非常勤講師）

◆コメンテーター

- ・瀧田寧（日本大学商学部・准教授）
- ・隅田英一郎（国立研究開発法人情報通信研究機構・先進的音声翻訳研究開発推進センター副センター長／先進的翻訳技術研究室室長）

◆司会

- ・木村護郎クリストフ（上智大学外国語学部ドイツ語学科・教授）

【目的・構成】

ワークショップでは、高度な機械翻訳が登場にすることで社会が大きく変わると問題設定したうえで、文系・理系の研究者を招きこの問題をどのように考察すべきかを議論した。

ワークショップの構成は、若手研究者がこの問題への考察を報告したうえで、招待したコメンテーターと報告者が議論するという形となっている。

【報告概要】

◆西島佑

「機械翻訳と未来社会について、現状から考えるための哲学的試案」

西島報告は、本ワークショップの導入的な報告であった。機械翻訳が発展することで様々な疑問・問題点があげられると考えられるが、そういった問題がどのようなものなのか、報告者による考察も加えた形で報告が行われた。

◆羽成拓史

「機械翻訳と言語ポライトネス」

羽成報告は、西島の問題提起を受けたうえで、言語行為論のなかから機械翻訳が必要とする発想について考察が行われた。羽成の指摘によると、機械翻訳が発展していくためには、人間関係に付随する社会的要因が前提となる言語使用の難しさを克服しなければならない。

◆瀬上和典

「翻訳の極北」

瀬上報告は、西島の問題提起を受け、「人間による翻訳は残るのか？」という問いを考察している。瀬上によると、人間による翻訳は形を変えつつ、より創造的な翻訳が目指されるという結論が得られた。

【コメンテーターとのディスカッション】

ディスカッションでは、コメンテーターから報告者へのコメントや批判のほか、機

械翻訳の技術者である隅田先生からは、機械翻訳に関する基本的な考え方が述べられた。

【質疑応答】

当日の会場には、さまざまな研究者や学生が来ており、実に様々な質問をいただいた。とりわけ、機械翻訳と言語帝国主義や文学に関する質問が目立った。

【反応】

当日に配布したアンケートでもっとも多かった反応は、「刺激的であった」「文系・理系の研究者とのやりとりがよかった」というものであった。問題点としては、質疑応答の時間が短かったことや、マイクの調子が悪かったことがあげられる。次回への反省点としたい。